

講演録

心理臨床のなかの子どもと家族

村 本 邦 子

今日はひどい雪のなかを、こんなにたくさん集まっていたいてありがとうございます。「心理臨床のなかの子どもと家族」をテーマにお話させていただきますが、このテーマについてはまだ考え中ですので、皆さんと一緒に私自身もまとめていけたらと思っています。

私は、1990年、臨床心理学をバックに、女性や子どもの支援をめざして、女性ライフサイクル研究所をスタートさせました。それまでは思春期外来のクリニックに勤めておりました、今で言うひきこもり、当時は不登校と言っていました、そんな子どもたちとかかわっていました。そのなかで、いろんなことを感じましたが、赤ちゃんから大人になるまでの発達の道筋をちゃんと踏んで育てていないということとくに強く感じました。そして、子育てや教育のあり方を考えさせられてきました。1990年というのは、私自身、二人目の子どもが生まれて、子どもを育てながらどういうふうに住事を続けていこうかと迷っている時でした。自分が子どもを産んでみて、子育て中のお母さんをサポートすることで、子どもたちの問題が大きくなる前に避けられるのではないかと思いました。子どもたちのカウンセリングをしていると、問題が早く出て、早く相談にこられれば解決も早い。遅くなると、解決もそれだけ難しくなり、時間もかかります。人間は、長年生きてきた習性をそうやすやすと変えられない。それを変えるためには、その習性を生きてきた時間と同じだけの時間がかかります。早ければ早いほど治りは早い、これを突き詰めていくと、子育て中のお母

さんたちにかかわっていくことで子どもたちの問題が予防できるのではないかと考えたのです。

私たちの活動の中で、虐待は、初めから大きな問題でした。一般のお母さんたちが「子どもを虐待してしまう」と訴えてこられました。今ではようやく、子どもの虐待が日本社会でも話題になり、虐待防止法が改正されて取り組みが始まりつつありますが、開設当時、社会の認識はそこまで至っていませんでした。10年たつて時代も変わり、あちこちで訴えてきたことが少しずつ受け入れられつつある感じがしています。ニワトリが先かタマゴが先かではないですが、お母さんたちとかかわっていると、子ども時代を何とかしないといけないと思うし、子どもにかかわろうとすると、親にかかわらないといけない。どっちが先かという問題ではなく、広い視点からバックアップすることを考えていかなければいけないと思っています。

最近、子どもたちの問題がクローズアップされていますが、実は少なくとも80年代後半から、似たような問題は現れていました。子どもと家族をめぐる問題としては、1977年、開成高校の息子を殺害した父親の事件がありましたし、1980年、金属バット殺人事件がありました。2浪中の次男が両親を殺害したという事件です。82年は、校内暴力が悪化して警察がこなければ卒業式ができないという時代でした。1983年、浮浪者狩り、いじめ葬式ごっこ、コンクリート詰め殺人事件というものもありました。92年、高校教師が息子を殺す、山形のマツト死、将棋の森安九段が殺された事件など、

次から次に子どもたちの事件は起こっています。ここ1, 2年, 急に子どもたちの事件が増えたわけではなく, じわじわと起こってきた。その時代ごとに切迫感はあるのですが, 解決をみないまま継続しているということだと思いません。

少年非行が増えた, 凶悪化したということは, 統計的には言えないと指摘されています。うちの研究所の年報「子どもたちは今」の特集で, 矯正教育にかかわっている津富さんという方も指摘していますが, 統計的に言うと, 少年犯罪も凶悪犯罪も増えているわけではない。しかし安易な快楽を求める事件が増えつつあるということは確かのようにです。強盗, 恐喝, 覚醒剤は増えています。80年代後半にもナイフの事件がありました, 私には忘れられない思春期の男の子との出会いがありました。不登校で会っていた子でしたが, なかなか話をしてくれない。何を聞いても「わからない」と言う。不登校ですが, 学校に行きたいか行きたくないかもわからない。でも行けない。自分がどうしたいのかわからない。私は, 「何でもいいよ。あなたが話したいことを見つけるまで待っているから。」と言って, ずっと待ちつづけました。毎週会って, 時間中座っているだけということが数か月続き, 3か月くらいたった時, ぼそぼそと歌を歌ってくれたのです。それは, ブルーハーツというグループの「少年の歌」でした。とても心を動かされました。今の時代の思春期の心を説明していると思いました。その心境は今, 子どもたちが持っているものと大きくは変わっていないと思います。こんな歌詞です。

「パパ, ママ, おはようございます。今日は何かから始めよう。テーブルの上のミルクこぼしたらママの声が聞こえてくるかな。ワン, ツー, スリー, フォー, 5つ数えてバスケットシューズが履けたよ。ドアを開けても何も見つからない。そこから遠くを眺めているだけだ。別にく

れてるわけじゃないんだ。ただこのままじゃいけないと気づいただけさ。そしてナイフを持って立っていた。ナイフを持って立っていた。そしてナイフを持って立っていた。

僕, やっぱり勇気が足りない。アイ・ラブ・ユーが言えない。言葉はいつでも『くそつたれ』だけど, 僕だってちゃんと考えてるんだ。どうにもならないことなんて, どうにでもなっていること。先生たちは僕を不安にするけど, それほど大切な言葉はなかった。誰のことも恨んじやいないよ。ただ大人たちに褒められるようなバカにはなりたくない。そしてナイフを持って立ってた。そしてナイフを持って立っていた。そしてナイフを持って立っていた。ナイフを持って立っていた。

少年の声は風に消されても間違っちゃいない。そしてナイフを持って立っていた。そしてナイフを持って立っていた。ナイフを持って立っていた。そして, いろんなことが思い通りになったらいいのにな。」

皆さんはどんな感じを持たれるでしょうか。私は, 思春期の子どもたちの苛立ちがよくわかるような気がしたんです。発達段階から言えば, 思春期とは, 「自分とは誰か」というアイデンティティを確立する時期です。アイデンティティとは, パスポートとか免許証のように身分証明なのですが, 自分は誰だ, 自分はこういう人間だというものです。子どもたちは小さい頃, 身近な人たち, 主には親, 家族, 自分が属する集団と同一化する形で自分を作っていく。そして, 思春期になると, 自分が準拠していた集団と自分の違いにも気がつき始める。それまで素直に受け入れてきた価値観, 親から学んできた価値観, 先生から学んだ価値観を点検し直して, 今まで親が言うから正しいと思っていたが, これは違うんじゃないかと疑い始める。反発を始めるわけです。思春期には, 自分とは何か, 親の価値観や属する集団と自分を区別する課題が

待っている。それをなし遂げて初めて、大人になれるわけです。そのためには段階を経なければいけない。自分は何が好きだ、どうしたい、自分はこれがいいと思う、悪いと思う。いろいろ試してみて、失敗したりうまくいったりする、という人生経験が必要です。しかし、子どもたちは、なかなか自分のことがわからない。自分が何を好きだと思うのか、どうしたいのか。学校に行きたいのか行きたくないのかわからない。自分の欲求が把握できない。それはなぜか。今の教育では、子どもの欲求が尊重されず、子どもは決められたルールに沿って従っていく。思春期になってこれまで与えられてきたものを問い直す段階に至り、このままではいけないと思うけれども、何をどうしていいかわからない。反発するエネルギーが湧いてくるのだけれども、何に反発したいのか、何をどうしたいのかわからない。そういう状況にあるのだらうと思います。

人間は本来、学びたい存在だと思う。小さい子どもたちが「あれは何？」「なぜ？」と聞きますよね。本来、学びたい存在なのに、学びたいという気持ちが沸くのを待たずに与えられてしまう。食事でも、おなかですぐ間もなく食べていたら満足感もない。おなかですいたと思って食べるから、ああ、おいしいという満足感も得られる。自分の欲求を感じないまま与えられて育ち、ある時点で、いきなり「このままじゃいけない」と思う。だけでも何をしたいかわからない。「大人たちに褒められるようなバカにはなりたくない」、その気持ちはよくわかりますよね。「自分は自分だ」と言いたい。これまで与えられてきたものに反発したいというエネルギーが高まっている。でもそこからどうするかを現実化するだけの人生経験を与えられずに来た。すると、その次に「ナイフを持って立ってた」となってしまうかねないのです。これは不幸なことです。「大人たちに褒められるよ

うなバカにはなりたくない」から「ナイフを持って立ってた」。最後の言葉が「そしていろいろなことが思うようになったらいいのにな」なのです。最後の言葉は、非常に幼児的な万能感の世界です。基本的信頼感を得た乳幼児は、はじめ、世界は自分を中心に回っているという万能感を持つ。現実はそのようではない。世の中には自分がいて、共存する他者がいて折り合いをつけながら生きていく。この歌の少年はこの発達段階を踏めず、万能感の時代のまま、体だけ大きくなり、知識だけ身につけてきた。

生まれたばかりの赤ちゃんは最初は何もわからない状態ですが、この世の中は良いところだ、自分は生まれてきてよかったという感覚、すなわち基本的信頼感を持つことが最初の大事な課題です。そして、次の段階で、自分の思い通りにいかないことがあることに気づき、それを受け入れていくという課題にぶつかります。3歳くらいが境になりますが、自分の欲求が重んじられると同じに、他者も大事な存在で、他者の欲求も大事にしなければいけないということに直面すると、葛藤が生じる。必ずしも自分の欲求が叶うわけではないということを受け入れ、葛藤に耐えられるようにならなければいけない。エリクソンの言葉で言えば「自律」、「自分コントロール」です。たとえば、子どもがスーパーマーケットで「おやつがほしい」と泣きわめく場面。今は買わないという約束だったならば、「欲しいけど買わない」という子どもの葛藤に、養育の責任がある大人が、その葛藤を収める枠組みを与えてあげる必要がある。人前で泣きわめくなら、静かなところに連れていって、おさまった時に言って聞かせる。葛藤に耐えるためには、感情に言葉を与える必要がある。おやつがほしかったのに買ってもらえなかった子どもに「あなたが悪い」でおしまいではなく「あなたはお菓子がほしかったんだね。でも今は買わないんだよ。欲しいのに買えないのは辛

いね」と言葉を与えてあげることで、人間とは面白いもので、不思議とそれで気が済むのです。欲求は叶えばいいけれども、叶わなくても、欲求を認めてもらい、葛藤に言葉が与えられ、誰かに共感してもらえるとスツとするのです。不思議ですよ。

この少年は、「言葉はいつもくそったれだけど」「先生たちは僕を不安にするけど、それほど大切な言葉はなかった」と言葉の持つパワーを信頼していないし、知らない。信じられる言葉を親も先生も発してこなかった。信じられる、力になる言葉が与えられてこなかったのだと思います。

大人が言葉を与え、枠組みを与える中で、子どもたちは自分をコントロールしていくことを身につけていきます。これをしていないから思春期になって暴走する。猛獣のペットのようなものです。本人に意図がなくても、ちょっとした引き金で、大きな事故が起こってしまう。止められないですね。小さいうちに、自分をコントロールする力を育ててやる必要があります。小学校高学年にもなれば、子どもの方が体も大きいし、力も強くなってくる。親が体で枠組みを与えることはできない。3つの子どもならできるんです。体罰はダメですが、暴れる子どもを抱き留めることはできます。大人が体で枠組みを与えてあげることができるのです。それによって子どもたちが枠組みを自分の中に取り込んでいける。それなのに、子どもたちは育ててもらっておらず、誰も止めることができない。いろんなことが自分の思い通りになったらいいのになど、幼稚なままにいる状況だと思います。今も根底にあるのは似たような状況だと思います。子どもたちは、決して得たいの知れない怪物ではない。年格好は大人びて見えるけれども、中身は相応の子どもです。自分のことを認めてもらえるとうれしいし、喜ぶ。自分が否定されたら悲しい、腹を立てる。昔も今も一緒です。

子どもたちの現れ方は変わってきているけど、異星人ではなく、基本は昔から同じだと思います。

もう一つ言っておきたいことは、子どもがキレルと言われますが、すぐにキレルのは今も昔も大人の方です。子どもがキレルことが許されるようになったとは言えます。昔は子どもの分際でキレルことは許されなかった。だからある程度の年齢がいくまで持ち堪えていた。キレルのは大人です。家庭内暴力で暴力を振るう夫、虐待する母親もそうです。普段はいい人でも、時々キレルのです。大人がキレルので子どもは学習するわけです。昔は子どもの地位が低かったので、枷があって一定の立場になるまでキレルことが許可されなかった。今は枷が外されて早くキれてしまえる。閉鎖された空間の中で力関係が生じて、皆が幸せでなければ、力のある者がキレて、力のない者が餌食になるという構造は今も昔もあったと思います。昔と今を比べてみると、社会自体が変わり、全体主義から個人主義へ移行した。国を挙げて頑張ろうという昔も、本当の意味では自己確立できていなかった。今は悪い意味での個人主義で、自分がよければそれでよしという感じですね。社会が変わって、大人たちも戸惑っている。確信をもって枠組みや規範を子どもたちに与えることができない。小さい時、大人が一貫した価値観、規範を与えることができれば、子どもはまず素直に受け入れ、思春期、大人になっていく一歩手前で規範を見直し、違う規範を自分なりに形作って生きていくと思います。今はいい意味でも悪い意味でも規範がない。大人の指し示す規範の中には間違いもある。それでも、その時、一番良いと思われる規範を提示することで、子どもはそれを手がかりにして自分なりの規範をつくっていくのです。今の時代、安易な快楽を求める非行が増えているのは、大人社会が子どもに与えている規範が、「お金を稼げばいい、モノ

があれば幸せだ。目先の快楽が重要だ」という程度のものでしかないからかもしれませんね。それを子どもたちは規範として無意識に取り込んでいるのだと思います。

皆が国のために頑張らしようという規範はいい規範ではないが、規範にはなった。それに向かってエネルギーを注いでいくことができた。全体主義から個人主義に移行して、大人が確信を持って自分が生きていく上で自信を持って提示できない。それが今の子どもたちの不幸だと思います。子どもたちは何に向かって生きていけばいいのかわからない。昔前は、勉強し、いい会社に就職して結婚するのが幸せな道だと教えてきた。でも、バブルが弾けてから、お金がたくさんあっても空虚なのだ、一流会社に就職してもリストラがある。目標を失い、方向性が見えない状況だと思います。将来に希望が見えない。根底に無力感があります。「何をやってもしれている」と。それが現代の特徴だと思います。子どもたちのもつエネルギーの向け先がなく、捌け口を失ったエネルギーが抑圧されて、みな悶々としています。地域社会の変化もあると思います。成人式の問題が話題ですが、人間の生活に祭の要素が必要だと思います。ただの儀式ではなく祭。無礼講でエネルギーを発散させる。非日常の場でエネルギーを発散させるもの。地域社会はそういう場を提供する機能を失ってしまいました。毎年、年末の暴走族がテレビに写されますが、それも同じようなもののように思っています。普段は規範のあるルールのある生活という日常があり、約束ごとの一つとして非日常、無秩序の中でエネルギーを発散させる場所という枠組みがあればよいのですが、それがありません。ひとつには、子どもたちのエネルギーを祭的に向けていく仕掛けがあるのかなと思っています。自然環境の変化もあると思います。去年、一昨年、無作為抽出性被害調査をし、インタビューをしました。

普段、面接室の中で相談に来られないような人の人生を聞かせてもらいました。深い傷を受けていても地域社会で受け止められてきた。自然の中で癒される部分も多くある。辛い時、自然の中で一人、草むらに寝ころんで風を感じたり、青い空を見上げて慰められる。都会の生活をしていると、そういう要素がないんですね。地域もなければ自然も失われつつある。教育の中身もなくなってしまっている。子どもたちは今、救われない時代を生きているなと思います。

キレるという現象を臨床心理学でとらえ直すと、一種の解離なんだと思います。人間は大きな傷つき体験があると、心をバラバラにして生き延びようとする傾向があります。この心をバラバラにするのが解離です。解離を理解するために、直線を思い浮かべてください。左側には健康な解離があります。右端には病的な解離、たとえばドラマにもあるような多重人格、バラバラになって別個の人格を持ってしまうくらいの解離があります。健康な解離は私たちが日常的に経験するものです。何かショックなことがあった時、そのことが頭から離れなくて、自分ではよく覚えていないが、無意識に切符を買って家まで帰ったなどという経験はありませんか。頭が一杯になってとらわれている自分と、切符を買って帰る自分が別々の行動をしている。これが解離です。人間の心は柔軟にできていて、必要に迫られると、部分部分で対処するのです。震災のとき、記憶が3日間すっぽり抜けるというようなことがありましたね。ショックが大きくて対処できない時、人間は心をバラバラにして生き延びようとするわけです。忘れてしまう部分と、その場で無意識に対処した部分と。お酒を飲んだら人が変わる人がいる。普段は明るい人がお酒を飲むと湿っぽくなるのか、逆もありますよね。これは、アルコールによる人工的な解離です。あの人は仕事ではキビキビしているが、プライベートな場面では印象

が違ふ、状況によって、時と場所によって人は自分を使い分けているなどということも見られますね。キレるという現象も一種の解離現象ととらえてもいいのではないかと考えています。暴力を振るう夫も、虐待してしまう母親もそうですが、普段の自分は、かくありたいと思う自分のみを生きていて、それについていけず怒りを抱えた自分は解離してふだんは抑圧されています。それで、何かを引きがねにキレると、いきなり暴力的に変身する。実際には、ふだん生きられていない部分がバラバラのまま心の底にあったのです。

自我状態障害という概念があります。多重人格ほどでないにしても、自我の状態が分裂している。健康な人でもある程度あるのですが、それぞれの自我状態の境界が緩やかで、疎通性があるとよいのですが、バリアが固くなり、コントロールできず、いきなり別の部分、別の自我状態が出てくる。ふだん、あまりにもいい人を作りすぎて、思うようにいかない怒り、葛藤、悲しみを表現できないまま溜めてしまうと、その部分がいきなり出てくる。これが、キレるという現象です。根底に深い傷つきがあり、本当の自分、怒り、悲しみなどの感情を含めた本当の自分を外界に表現することができず、偽りの自己、こうあらねばならないというイメージに自分を当てはめてしまうがために、表面的には一応適応しているのですが、内部に別の自我状態を抱えているのです。記憶はつながっていますが、一種の二重人格と考えてもいいと思います。

今の子どもたちとかかわって思うのは、表面上の適応はしていますが、「自分の気持ちかわからない」と言い、自分の感情に責任を持たせません。事件が起こると「普通の子もだった」と言われることが多い。隣の人と会ったら挨拶する。宿題はやる。現実適応的なところはできているが、自分の感情がどんなのか把握して

表現することが苦手です。「ムカつく」「あいつなんか早く死ねばいい」とすぐ言う。ムカつくという言葉には原因がはっきりわからない苛立ちがある。「あいつムカつくから死んでほしい」と言う子どもに、「どうしてそんなに腹が立つの?」と尋ねていくと、理由はある。「あいつはゲームで負けたら怒りだして殴ったりする。だから腹が立つ」など。こうして怒りに言葉を与えることができれば、何に腹が立つのかわってくる。「あいつはこの時にこうした、この言葉が嫌だった。あの行動に傷ついた」ということを具体的に認知でき、表現することができたら解決できることも多いと思います。ところが、多くの場合、なぜムカつくのか本人がわからない。自分の感情を自分で理解できてない。それは、大人が子どもの気持ちに耳を傾けていないからです。子どもたちはやみくもに苛立っている。苛立ちを表現して解決するすべもない。何に腹がたっているかわかれば、解決できることもある。解決できなくても、言葉で表現できて、言葉を与えてもらえて、人に共感してもらえたら、それでスッと済むこともある。

原因がはっきりしない苛立ちは、自分でコントロールできませんので、些細な引き金で、より弱いところに行く法則があります。苛立ち、攻撃的な破壊的なものが溜まっていくと、ちょっとしたきっかけで爆発する。ふつう、そのきっかけとは、それだけの怒りを向けられるに値しない刺激であることが多いものです。でも、一時的な発散では解決にならないのです。怒りの源と直面していないわけですから。ちょっとした刺激になったもの、しかも自分の方が力を発揮できそうなシチュエーションで、弱者に向けて暴走して暴力が起こるのです。これらのキレる現象は広い意味で言えば、トラウマの症状と一致します。

トラウマとは、大きな傷つき体験、死ぬかもしれないと思うような恐怖体験。虐待、事故、

地震,いろいろなことがトラウマとなり得ます。深い傷つきがあるとどんな症状が出るのか。記憶障害,混乱,時間感覚の混乱,死の恐れ,依存,ひきこもり,苛立ち,しがみつき,対人関係の不信感,疎外感,孤立感,歪んだ一般化,疲労感,頭痛,腹痛,カゼをひきやすい,絶望感,無意味感,方向性の喪失,無力感,悲しみ,感覚マヒ,罪悪感,怒り,自己評価の低さ,他者の目ばかり気になる。こういうものが広い意味でのトラウマの症状ですが,今の子どもたち,そして大人たちの状況は,これらにぴったり一致するような気がします。では,私たちにとって,何が深い傷つきになっているのか。職業上もプライベートでも,大人や子どもを見ていて,広い意味での虐待はそんなに特殊なことではないと思っています。心理的な虐待,ネグレクト,養育の拒否は案外一般的ではないかと思います。小学校のPTA新聞で,卒業を前に「大人から言われてうれしかったこと,嫌だったこと」を子どもたちが一言ずつ書いていたのを見たことがあります。多くの親が「お前みたいな奴は死んでしまえ。役立たず」など,ひどい言葉を口にしていました。言った大人はそんなに大したことはないと思っても,子どもたちは傷ついているわけです。そういう言葉が一杯ありました。子ども同士が「死ぬ」と言うけど,親たちも言っているんだなど。これらは,広い意味では心理的虐待だと思います,子どもの立場から言えば。年齢の低い子どもにとって「この家を出ていけ」「こんな子どもはいらん」と言われたら,その子は生きていけない。親は本気で追い出すつもりはなかったとしても,子どもは「こんな家は嫌だ」と飛び出ても,帰るところは家しかない。生きていくためにはそこしかない。子どもとはそういう状況を生きています。大人の側にそれほどの意図はなくても,子どもたちが傷つく言葉は一杯あります。

話題になりやすいのは,身体的虐待,性的虐

待ですが,ネグレクト,養育拒否,積極的に何をやるのではなく,すべきことをしない虐待もある。身辺のケアをしなければ死んでしまう赤ちゃんを放置するとか,子どもたちを学校に行かせない,感情的にケアをしない,子どもたちがトラブルを起こして大人の助けを必要としている時に,適切に大人が入って助けない,どれも,広い意味でのネグレクトに入ります。大人が大人としての責任を果たさない。学校の教師でも,殴れば体罰教師と訴えられるから,事なかれ主義で何もしないでおこうという風潮が一方にある。それも広い意味でネグレクトだと思います。体罰教師が信望を集めるということがあります。それは,子どもたちに真剣にかかわる,コミットする,子どもたちに必死になってかかわる姿勢があるからだと思います。体罰があるから信望を集めるのではなく,体罰があっても,それ以外の部分で熱心に子どもたちにかかわるといふ姿勢が見えると子どもたちは慕うんです。子どもたちに人間としてのかわりをしない,事なかれ主義の教師に子どもはなつきません。親であれ,教師であれ,子どもたちを取り巻く大人が「これがいいんだ」と自信を持ってかかわってやれないという意味で,子どもたちは見捨てられている状態です,情緒的に。食べ物は食べさせてもらっているが,「これが大事だ,こうやって生きていきなさい」と示してもらえないのは広い意味でのネグレクトだと思います。

トラウマの世代間連鎖について,「女性のトラウマと歴史の記憶」ということで最近関心を持っているのは,個人レベルのトラウマではなく社会全体のトラウマです。トラウマの領域は世界的にも大きな展開を遂げていますが,その中で問題にされているのは大量虐殺,民族浄化などのマスレベルでのトラウマが世代を越えて孫たちの世代にいろんな形で出てきている。トラウマが世代を越えて連鎖していくという問題

です。個人のトラウマにも連鎖はあります。ただし、虐待してしまう人は虐待されていた可能性は高いが、虐待されたからといって虐待するとは限らないということに注意して欲しいと思います。データの的には30%とされています。つまり70%は、虐待を連鎖させません。それ以上に、社会的な連鎖、社会的なトラウマが世代を越えて受け継がれることが話題になっています。これらのトラウマは、家族ユニットを通じて次の世代に伝達されると言われています。ベトナム帰還兵が感情を表せず、お酒を飲んで家族に暴力を振るうことから社会的な問題になりました。情緒的に交流できない、妻や子どもに暴力を振るうような家庭で育てば、子どもたちは問題を受け継ぎます。暴力を受けて育ち、情緒的にケアしてもらえない。その子が親世代になった時、いい子育てのモデルはない。子どもに対して適切な養育ができない。家族のユニットを通じて癒されないままでトラウマが世代間に伝達される。

子どもたちのいじめのひどいのをみると、軍隊の中で起こったことと重なります。「心の闇」という言葉がいつか話題になりましたが、子どもの抱える闇は、個人レベルで生じている闇ではなく、親の世代から受け継がれている闇という気がしてならない。臨床心理学は個人の心に働きかけるものですが、それを越えた視点を持って考える必要があると思っています。社会的な要因、文化、社会的なところを見ていかないと、個人レベルでは解決できません。ブルームはトラウマの理論をパスツールの細菌の発見になぞらえました。細菌が発見されるまで、伝染病になった人を善意で看病する人たちが次々と感染しました。トラウマもそれと同じだと。トラウマを持った個人に善意がかかっても、手洗いはじめ衛生をよくしないと、知らないうちに伝染していくのです。いくら個人レベルで働きかけても、社会自体に感染源があるか

ぎりは同じことだと。個人の治療と同時に、社会への働きかけが必要です。トラウマは感染する。親世代がトラウマというウィルスを持っていたら子どもに伝染してしまう。加害者とかかわり、被害を受けると感染する。そして、治癒しなければ、今度は感染させる可能性もある。日本の子どもたちの問題を見て、子どもたち個々の問題ではなく、日本社会全体、日本の文化の中にあるトラウマを見据えて働きかけていかなければ、どうにもしようがない。一人の子どもに話しかけても解決できる状況ではないという危機感を覚えています。

虐待の世代間連鎖にかんして、ある研究では、世代間連鎖を促進させる4つの要因があることがわかっています。一つが文化的要因です。その文化が暴力をどう定義するかによって大きく変わります。90個の社会を研究して90のうち16の社会で、子どもへの折檻がない文化があり、そこでは、家庭内暴力は低い。子育てに体罰を与えずに育てる文化の中では、全般的にドメスティックバイオレンスは低い。ところがそこから違う文化のなかに家族が引越した場合、そこが暴力に満ちた社会だと家庭の中にも暴力が入ってくる。感染するのです。二つ目が社会的政治的要因です。戦争、犯罪が高いとレイプが多くなる。安全感が薄れて危機感が高まりますから、虐待の世代間連鎖が高くなる。子どもが望まれて生まれるかどうか影響します。中絶が禁じられると虐待が増える。中絶を認めることは子どもの虐待を容認しているように見えますが、中絶が禁じられると子どもの虐待が増えるということが、文化人類学的な観点からわかっています。望まれた子どもでなければ虐待、暴力は増えるのだらうと思います。女性擁護の政治も大きくて、女性の立場がどこにあるかが、社会の暴力、虐待にかかわっている。子どもの権利をどれだけ社会が認めているかもかわります。どれから、心理的な要因につい

ては、さきほど言いましたように、個人的に暴力を受けたら次に引き継がれる率が30%。最後に身体的な要因。体が弱い、病気などが子どもに遺伝させて、どちらもがしんどい状況だから虐待が生じやすい。トラウマはいろんな次元で増加されたり、減らされたりする。それぞれの次元に働きかける必要があります。

また、日本文化のトラウマを考える時、日本の歴史を見直す必要があると考えています。文化的社会的歴史的な要因。何が日本の社会のトラウマになっているか。歴史を振り返ると、戦後の立て直しの方向性がどこかからずれてきた。日本は、明治以降、西欧列強をめざして植民地を増やしていく価値観に乗って出発した。軍国主義でアジアの国々を制覇し、力で抑圧し搾取していく。そして、戦争に負けて敗戦からの立て直しがあった。どこかで方向性を間違った。第二次世界大戦のトラウマが清算されずに今まであるのだなと感じます。昔から戦争はあったわけですが、特に、20世紀の戦争は科学技術の進歩とともにマスのレベルでの被害が大きいです。昔は男たちが戦場に行って刀で切り合って死んでいた。戦争の規模も小さかったし、日常に戻っていくイニシエーションのシステムもあったと思います。戻った先に癒しのコミュニティもあった。癒されない人たちは出家する道もあった。少数の人が傷ついたとしても周囲が健康なら地域で助け合って癒していけるわけですが、全体が傷ついてしまうから癒しの機構が働かない。戦争で被害を受けた市民、戦場に行った人たちが、みな傷だらけですよ。目の前で大事な人が死んでいくのに、助けられない。自分も生きるか死ぬか。そういう状況乗り越え、何とか安心して暮らせる社会を目指してやってきたはず。第一次大戦で死んだ一般市民は5%だった。第二次世界大戦で死んだ市民は50%。ベトナム人で死んだ市民は80%。それだけ20世紀以降の戦争は大きなレベルで犠牲が出てい

る。周囲が健康だったら助け合えるものが、ほとんど全員が傷ついて、誤魔化して生きるしかなかったのだと思います。戦後50年たって震災が起こり、トラウマが日本社会で言われるようになりました。

トラウマの回復に至る段階について考えてみましょう。最初は、破局・混沌です。わけがわからない。その後、生き残ったことにホッと、混乱がある。次にマヒがきます。それから、もう一度考え直して新しい自分を作っていくという段階がきます。つまり、自分のトラウマを考え直すまでに時間が必要なんです。今、日本でも犯罪被害者の支援が言われていますが、危機介入、その場で対処されることで予防する、それも必要なのですが、傷ついた人が自分を癒していく時、時間も必要です。解離や感覚マヒによってなんとか切り抜け、安心した状況になってようやく自分の過去を見つめることができる。そこから過去とトラウマと自分自身に向き合う作業が始まります。トラウマと向き合うためには一定程度の時間と回復がいります。日本社会は全員が傷だらけになった段階で、食べるものに事欠かないように子どもたちのために必死に頑張って働いた。経済を成長させて物質的にはどこにも負けないくらい子どもたちに物を与えられる社会を作った。立ち止まって今、方向喪失してしまった。次にやるべきことは、過去を振り返り、自分たちの傷つきと直面して再統合し、未来につなげていくプロセスではないか。日本軍がしたことを見直すことに対して強い反発がありますが、アイデンティティ、自分とは何かを確立するためには自分の過去と向き合うことは避けられません。その点、ドイツは日本より進んでいます。それでも、ドイツの子どもたちの70%はドイツの過去と肯定的同一化はできないのだそうです。自分たちの国に対して70%の若者が肯定的なアイデンティティを持っていない。でもそこを経て先に進ま

ないといけない。被害としてのトラウマもある，加害としてのトラウマもある。どちらもどう向き合っていないといけない。それを抜きに形だけを作っていこうとすれば，もとの全体主義に戻るしかない。トラウマを受けた人たちの回復に付き添わせていただいているのですが，そのプロセスは辛いです。自分の嫌な感情と向き合っていないといけない。でもそれを越えると未来が見える。過去を切り捨てては未来に向えない。日本社会がトラウマを抱え，これから先，自分たちの過去を見直し，何を大切に社会を創造していくのかを考える時期が来ていると思います。

ドイツの研究を見ると，国家レベルで犯した過去の行為を受け入れるために4つの段階がある。攻撃的な防御，向き合いたくないから攻撃的にアグレッシブに否定する。次の段階が合理化です。「どこだってやるじゃないか」。その段階を越えると，罪を受け入れて苦悩する。その次に歴史から学び直して道徳的な責任を引き受ける。そういう道筋がある。ドイツの高校生たちがナチスの歴史をどうとらえているかをインタビューして，そういった結論が出されていました。これから先，日本もそうになってほしいなと思います。国際戦犯女性法廷というのが，年末にありました。NHKで1月29日から4日連続で放映されるそうです。ラッセル法廷に倣う形で，日本軍のいわゆる「従軍慰安婦」の問題を世界のフェミニストたちが集まって裁くという試みでした。残念ながらあまり報じられませんでした，NHKが放映を決めたことは評価に値します。全体主義に戻るのを避けるために，歴史と直面する作業は避けて通れないのです。

臨床心理学がすべきことは，個人レベルでの回復と平行して，社会歴史的なことにも目を配り，そこに対しても介入していく必要があると思います。どういう形で自分たちの歴史と直面

し，どんなふうに向き合って責任を負っていくかも研究していくべきだと思います。家族システムを通じてトラウマが伝達するとすれば，家族システムにどう介入していけるか。家族を孤立させずにサポートするネットワークを作っていく。親業のプログラムを公的に広める。トラウマによる歪みをなくすような保育所，幼稚園などのディケアのシステムを作っていく。産後のケアをする体制をとっていくなど。子どもには発達課題があり，あるところまでは一人では生きていけない。家族が必要です。家族の定義は難しいですが，私は，ごく身近な親密な小集団と定義しています。小さな集団の中に属して集団と同一化する中で自分を育て，ある年齢までいくと，そこから相対化するような自己，個を確立する発達過程がある。大人だって一人で生きていける人は少なく，親密な人，パートナー，小さな集団，密接な関係を保つ集団が必要です。そういうものを家族と呼びたいと思います。私自身の提案としては，家族を血縁に限るのではなく，人中心に創造するものと捉える。この親のもとに生まれたから家族ではなく，その子を取り巻く身近な大人たちが，子どもを支える家族を創造していくという発想が必要があると思います。昔は大家族や地域社会が同心円的に子どもを囲み，見守ってきました，今は，人も家族も地域もバラバラです。子どもを見守る層が非常に薄くなってしまった。血縁を越え，仲間を巻き込んで，意図的に大家族を身近に作っていく必要があるのです。私は，「3世代地域子育て交流事業」というプロジェクトにかかわっているのですが，高齢者を早々と介護の対象にするのではなく，元気な高齢者の力を地域に還元するという発想です。昔と違って，血のつながった子どもや孫は遠くに住んでいるから，地域で子育てをしている子ども世代，孫世代に貢献する。子どもの世話をしてもらおうことでお母さんは助かる。子どもたちは親ではなく

上の世代の知恵から学びます。そして、高齢者たちは、そこに生きがいを見出すのです。意識的な大家族、血縁にとらわれないコミュニティを作っていく。自分の意思で新しい家族を創造していくのです。さきほど発達課題について述べましたが、エリクソンの生涯発達理論では、思春期にアイデンティティを確立した後、親密な人間関係を持ち、その後、次世代を育てると言う課題を挙げています。わが子でも仕事でもいい。ここでは自分さえよければいいという価値観を越えて、次の世代に何かを受け渡し、そこに喜びを見いだすという課題です。それをクリアできた人は、最後の課題、統合性を果たし、安心して死んでいけるのだとエリクソンは言っています。次の世代に残すことが自分の喜びとしてできたら、その人は安心して命のつながりを信じ、じたばたせずに死んでいける。自分のことだけにとらわれていると、自分が死んだらおしまいなので、絶望するというのです。

これから先、大人たちがどういう価値観で生きていけばいいか。全体主義の時代は個を殺して全体のために生きさせられてきた。次の段階は自分の人生に喜びを見いだそうとしていると思います。若い人たちの夢はフリーターをやってテレビを見ることだそうです。高齢者の生きがい調査では、旅行をすること、テレビを見ることだそうです。若者たちの夢と似ているじゃないですか。個人のカウンセリングにくる人たちとかかわって思うのは、これまでは自分を偽り、かくあるべきと生きてきて、うまくいかずに躓いてやってくる。次の段階は自分中心に生きようと努力する。ある時期は人のことを考えるゆとりがない。これまで自分を殺して生きて

きたから、今度は自分を取り戻すために自分のことを中心に考える。ある程度その時期が過ぎると、やっと自分がわかってきて、人とともに生きていくことが可能になります。自分を殺している時はつねに人のために動いているわけですが、実は喜びを持ってしているわけではない。しなければいけないと思ってやっている。滅私奉公的な働き方をする大人を見て、子どもはいいと思わない。あんな生き方はするまい、自分たちはもっと楽しんで生きたい、でも、そこを越えたら、目先の快樂だけでなく、本当に人のためになることが自分の喜びでもあるという、もう一つ先のステップがあると思います。上の世代が滅私奉公的に生きて過労死してしまう姿を見て子どもたちはそんな大人になりたくないと思った。次に楽しむことができる世代を見て「それっていいな」と見習っている。その先に大人が、自分を大事にするが、人も大事にする。自己コントロールを経て他者を尊重する。そこまで行けるということ子どもたちに見せることができたなら、子どもたちもまた自分たちの将来に夢を持てると思うんです。そうして初めて、子どもたち自身が変わってくると思います。

講師紹介

女性ライフサイクル研究所所長、臨床心理士。京都大学大学院教育学研究科修了。専門は臨床心理学及び女性学。2001年4月より立命館大学大学院応用人間科学研究科教授に就任予定。著書に『幸せ家族という嘘～娘が父を語る時』、『母は娘がわからない』、『娘が母を拒むとき』の翻訳、『子ども虐待の防止力を育てる～子どもの権利とエンパワメント』など。